

ルカによる福音書14章 「安息日の食事」

1A パリサイ派との食事 1-24

1B 律法主義 1-6

2B 上席と見返り 7-14

3B 応答の拒否 15-24

2A 付いてくる群衆 25-35

1B 費用の計算 25-33

2B 塩気 34-35

本文

ルカによる福音書 14 章を開いてください。イエス様がエルサレムに行く旅におられますが、そこには大勢の群衆が付いてきています。それから、パリサイ派の人たちもやってきます。13 章では、ヘロデがあなたを殺そうとしているとパリサイ派が伝えてきました。ここはガリラヤか、もうペレア地方に入っていると思います。ガリラヤだけでなく、ペレヤもヘロデ・アンティパスの領地だからです。けれども、イエス様は十分に働きをここでやり、それからエルサレムに向かう話をされました。

ところで 13 章で、イエス様が群衆に対して、「13:26 あなたがたはこう言い始めるでしょう。『私たちは、あなたがたの面前で食べたか飲んだりしました。また、あなたは私たちの大通りで教えてくださいました。』」と言われました。そしてイエス様は、終わりの日にアブラハム、イサク、ヤコブ、すべての預言者が神の国に入って、大勢の異邦人も食事に加わっているが、あなたちがたは外に放り出されると警告されました。神の国に入るといのが、食事を共にして祝宴をするということがあるのです。ユダヤ人にとって、共に食べることは敵対していない、互いに平和がある。そして豊かさを表していました。同じ食べ物を体の中に吸収することによって、一つになることを示していました。考えてみてください、喧嘩をしながらご飯を食べることができますか？文字通り、腹が痛くなると思います。

契約を結ぶ時に、昔は食事をしたというのがあります。ヤコブが妻たちや家畜、奴隷を連れてラバンのところから出て行った時、ラバンは危害を加えるつもりで追っかけていきましたが、神の使いが彼に戒めました。ラバンとヤコブはそのように敵対しましたが、最後に、ミツパにて契約を結びました。ここで主が見張りをしているようにという内容ですが、互いにこの境界線から出て行かないということですが、それで、「創 31:54 ヤコブは山でいけにえを献げ、一族を食事に招いた。彼らは食事をして、山で一夜を明かした。」とあります。

ですから、そこには平和が象徴されています。交わりや一致が象徴されています。イエス様が、悔い改めるラオディキアの教会に対して、入って来て共に食事をするという約束がありましたね

(黙示 3:20-21)。そして、終わりの日には神の国で祝宴が催されることが預言されています。「イザ 25:6 万軍の【主】は、この山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。」イエス様が最後の晩餐でもお語りになりました、「22:16,18 あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をすることは、決してありません。…あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」ですから、終わりの日に食事の本当の意味が成就します。平和と正義に満ちた神の国が、イエス様が流された血によって実現するのです。

そこで食事の場面が次の 14 章に出て来ます。15 章にも出て来ます。14 章では、パリサイ人がイエス様を招いた食事の席です。15 章は取税人や罪人が招いた食事です。それぞれの場で、イエス様が何を行われ、言われるのかに注目してみたいと思います。

1A パリサイ派との食事 1-24

1B 律法主義 1-6

1 ある安息日のこと、イエスは食事をするために、パリサイ派のある指導者の家に入られた。そのとき人々はじっとイエスを見つめていた。2 見よ、イエスの前には、水腫をわずらっている人がいた。

イエス様が、「パリサイ派のある指導者の家」に招かれています。これまでも、パリサイ派の人に招かれたことがありますね。シモンがいました、その時は不道德の女が入って来て、イエス様の御足に口づけして、涙を流し、髪の毛で拭いて、それから香油をたらしました。また、他の時にも招かれています(11:37 以降)。その時に、洗いの清めの儀式をイエス様が行われなかったのも、彼らが驚きましたが、それでイエス様は、「外側は清めるが、内側は強欲と放縦でいっぱいです。」と叱責されました。そして、ここですが、パリサイ派でも指導者の家です。招かれる人々は、栄誉ある人であります。イエス様も、その栄誉あるユダヤ教教師として、少なくとも表向きは招かれています。そして安息日においてなので、礼拝の後にこのようにして、しばしば食事に招きました。厳かというような感じではないですが、けれども、権威ある者たちの集まる会合のような雰囲気満ちていたことでしょう。

けれども、ここに普通は招かざる人が招かれています。「水腫をわずらっている人」です。水腫は、体液が異常に大量に溜まった状態であり、体が膨れ上がっています。そして、「人々はじっとイエスを見つめていた」とあります。ということは、水腫の人がいるというのは、招かざる客ではなく、むしろ敢えて招かれている人で、そして、イエス様を試すために招いたということが分かります。普通、水腫の人を彼らは招きません。罪によってもたらされたもの、少なくとも儀式的には汚れていると当時のユダヤ教では考えられていましたから。けれども、彼らは既に知っていたのです。イエスは、癒す人で、憐れみを安息日においてもやめないということです。彼らは、安息日に人を癒すのは、

命にかかわること以外は行ってはいけないとしていました。癒すことが労働だと考えていたからです。それでイエス様が彼らの律法の解釈に違反するのを確かめ、それでイエス様の評判を落とすつもりでした。

3 イエスは、律法の専門家たちやパリサイ人たちに対して、「安息日に癒やすのは律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか」と言われた。4 彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いて癒やし、帰された。5 それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者が、あなたがたのうちにいるでしょうか。」6 彼らはこれに答えることができなかった。

イエス様は、質問を直ぐに行なわれました。彼らは黙っています。イエス様は彼らに反論ができないのを見て取って、それから癒されました。おそらく、次の律法に関わる論争に当事者であるこの人を巻き込みたくなかったのかもしれませんが。そして、彼らの律法の解釈の矛盾をはっきりと語られました。井戸に息子や家畜が落ちたら、安息日に引き上げるかどうか？出エジプト記 21 章 33-34 節に、井戸に家畜が落ちた場合に持ち主が蓋をしておらず、それに対する償いについて書いてありますが、このように、井戸に落ちてしまうことはよく起こったことなのでしょう。日本の井戸とは違って、自分に穴が開いているようになっているので、落ちてしまうことがあるのです。ユダヤ教では、エッセネ派が安息日だからその家畜は助けるべきではないと教えていましたが、パリサイ派は許可していました。けれどもエッセネ派も、息子が落ちたらそれでも助けないのでしょか？分かりませんが、憐れみの行為をして、その人を癒し、解放するということを、家畜でさえするのに、また息子にもするのに、どうしてこの水腫の人にはいけないと言うのか？と尋ねています。

前回もお話ししましたが、安息日というのは、イスラエルの民にとって自由と解放をも意味しています。神ご自身が六日で天地を造られ、七日目に休まれましたが、イスラエルの民は休む時なく奴隷として労役の中にいました。そこから解放されて、今、神にある自由を得た。私たちはもはや、人の奴隷ではなく、神の所有の民なのだということを表していたのです。エジプトでの苦役は、罪の奴隷としていつまでも苦しんでいる私たちの姿でもあります。そこから主がご自身の流された血によって私たちを解放し、安息を与えられたという意味が、安息日はあります。ですから、イエス様にとって安息日に、これまで束縛されていた人々を解放するのは、まさに自由と解放を与えることであり、安息日に違反するどころか、安息日にこそふさわしい憐れみの行いだったのです。

私たちは、彼らの食事の席から、教訓を学び取ることができます。本来、神の平和が実現する食事の席において、何がそれを妨げるのか？ということです。安息日の食事で、水腫を患った人が人々の作った規則の中で癒されないということは、律法主義が私たちの平和な交わりを壊してしまうということを意味するでしょう。キリストは罪人を救うために来られたのに、神の救いを願い、期待して私たちは交わっているのに、自分たちの利己的な主張を持ち込んで神の働きから目を離しているということは、よくあるでしょう。私たちの交わりが絶えず、神のキリストにある救いが最高の

喜びになるように、自分自身を求めるのではなく、キリストを求める交わりとなるように祈ります。

2B 上席と見返り 7-14

7 イエスは、客として招かれた人たちが上座を選んでいる様子に気がついて、彼らにたとえを話された。

場面は同じです、安息日における、パリサイ派の指導者の家での食事の席です。おそらく、この字のようになっていて、主催者である主人は、そのこの字の奥の真ん中に座っていたのでしょう。そして、そのすぐ右と左が上席ということになります。どこに自分たちが座るかということは、当時のローマ社会でも、またユダヤ教の社会でも、その人の地位を示す象徴的なものでした。そこに、我先にと上座を選んでいる姿をイエス様はご覧になりました。

8 「結婚の披露宴に招かれたときには、上座に座ってはいけません。あなたより身分の高い人が招かれているかもしれません。9 あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』と言うこととなります。そのときあなたは恥をかいて、末席に着くこととなります。10 招かれたなら、末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『友よ、もっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのとき、ともに座っている皆の前で、あなたは誉れを得ることとなります。11 なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

イエス様は、披露宴の喩えでお語りになりました。披露宴の喩えをイエス様はしばしば使われますが、それは、神の国の到来において、子羊の婚姻とその後の披露宴が行われるからです。天に引き上げられた教会が子羊なるイエス・キリストと婚姻することが黙示録 19 章にあります。そして地上に再臨されて、そこで大きな祝宴が行われます。ですから、ここでの姿は神の国のことも意識して語られています。

ここでの要点は、もちろんへりくだることですが、気を付ける点があります。へりくだる、自分を低くするということは、相対的なものではないということです。つまり、他の人と自分を比べて自分を低めることではありません。招待している主人、主催者が大事だということです。主催者の招待にしたがって招かれて、そして主催者の判断でどこかの席に決まります。ですから、主が自分を引き上げられるのだ、主が自分を高めるのだということを考えれば、自分自身で自分を操作する必要がなくなります。自分はいくまでも招かれた者であり、招かれた者としてふさわしく行動する、というところに、へりくだる秘訣があります。イエス様がここで語られていることは、箴言 25 章 6-7 節を意識しておられると思います。「王の前で横柄にふるまってはならない。身分の高い人のいる所に立ってはならない。高貴な人の前で下に下げられるよりは、「ここに上って来なさい」と言われるほうがよいからだ。」このように、王の前にいるということ、キリストの前にいるのだということから、へりくだりが生まれます。

末席に付くというのは、自分自身で高めることを止めている姿です。自分で認められようと努力することを放棄することです。そうすると、楽です。自分で高めるのではなく、主が高めてくださるからです。「I ペテ 5:5-6 同じように、若い人たちよ、長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与えられる」のです。ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神は、ちょうど良い時に、あなたがたを高く上げてくださいます。」

このようにすれば、心に安心感のある、平和と秩序のある、喜びの披露宴になると思います。神の恵みはそこには満ちます。招かれた人々が主催者の意向に従っている姿は、落ち着きます。私たちの交わりもそうですね。私たち一人一人が、この姿勢、へりくだりをもって主の中に留まっている時に、主に仕えている時に、そこにはイエス様がおられます。イエス様が披露宴の主人となって、ご自分のみこころのままにその平和と喜びに満ちた会を進行させていただきます。

12 イエスはまた、ご自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や晚餐をふるまうのなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。彼らがあなたを招いて、お返しをすることがないようにするためです。13 食事のふるまいをするときには、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい。14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」

当時、招く人々がこのように障害者の人たちを招くようなことは普通しませんでした。ですから、ここでイエス様が言われていることは、驚くことでした。身分の低い人を招くと言っても、まさか身障者を招くなんて、という感じです。ユダヤ教の中で、身体に障害を持っているというのは、やはり罪から来ているということを感じていて、集会の中に入れない、あるいはあまり歓迎されないものでした。けれども、こういった人々が目が見えるようになり、耳が聞こえるようになる、ということになると、それは神の国の到来の印でもあったのです。ですから、イエス様が癒しを行われていた時に、確かにこの方は神から来られたキリストだという証しだったのです。

けれども、イエス様は神の国における平和、そこにある恵みを教えておられるのです。それは、「惜しみなく与える」ということです。お返しができない、というところに、惜しみなく分け与えることのできる自由を得ることができます。けれども、私たちは見返り、お返しを全く期待するなということではありません。人は必ず、自分のしていることに対する報いということを意識しています。神は、報いについて一切考えるな、ということをお教えされません。むしろ、報いについても神のほうに目を向けなさいということなのです。それで、イエス様が「あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」とされています。ダニエル書 12 章に、復活した時に報いを受ける約束が書かれています(2-3 節)。やはり、ここにおいても、自分と他の人という関係よりも、神と自分との関係の中で考えているのです。

ですから、私たちの中に神の国があるためには、恵みが必要です。恵みは、見返りを期待せず、惜しみなく分かち合うことです。神ご自身に期待します。人から認められたいということで、私たちキリスト者が互いに付き合ったら、どこかで亀裂が走ります。人に対して行なう良いことは、それは主ご自身に対して行なっているのだという思いで行なうのです。この小さき者に行なったのは、わたしに行なったのだとイエス様は言われました。そうした思いで、期待して付き合うのではなく、忍耐して、受け入れて付き合います。ローマ 14 章 1 節に、「信仰の弱い人を受け入れなさい。」という言葉があります。受け入れるということは、神の恵みが満ちている状態です。神は、こんな僕をも忍耐してくださっているのですから、互いに忍耐し、寛容を尽くすところに、全ての人に対する福音が広がります。

3B 応答の拒否 15-24

15 イエスとともに食卓に着いていた客の一人はこれを聞いて、イエスに言った。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう。」

客の一人は、義人の復活について聞いた時に神の国を思いました。そして、今、食事の席についていますが、神の国において食事をするのを想起しました。けれども、ここにいる人たちのほとんどが、神の国に入れないことをお話しになられます。

16 するとイエスは彼にこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大勢の人を招いた。17 宴会の時刻になったのでもべを遣わし、招いていた人たちに、『さあ、おいでください。もう用意ができましたから』と言った。18 ところが、みな同じように断り始めた。最初の人是这样言った。『畑を買ったので、見に行かなければなりません。どうか、ご容赦ください。』19 別の人はこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです。どうか、ご容赦ください。』20 また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』

これは、あまりにも主催者に対してあまりにも失礼な行為です。理由になっていない言い訳です。畑を買ったということは、僕たちがいます。僕に見に行かせればよいことです。五くびきの牛も同じで、それだけの牛がいるということは、だれかを雇っているはずで、自分で試さなくてもいいです、誰かに任せればよいです。そして、「結婚したので、行くことができません。」というのも言い訳です。確かに新婚は大切にすべきことが、申命記に、初めの一年は妻を喜ばせ、戦いに行つてはいけないことがかかれていますから、大事です。けれども、この宴会は誰が招いているのか？ということを考えれば、神に招かれていますから、本当に稚拙な言い訳でしかありません。

21 しもべは帰って来て、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい。』

先ほどの、お返しが出来ない人々です。主人は、このような人々を招いて祝宴の席を埋めておられます。恵みによって入れられています。

22 しもべは言った。『ご主人様、お命じになったとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』
23 すると主人はしもべに言った。『街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいにしなさい。24 言うておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。』』

こちらはもう、無関係の人たちです。ここでイエス様が意識されているのは、異邦人たちのことです。ユダヤ人こそが、メシアによって神の国に招かれているのですが、招かれている人は断り、かえって招かれていない、排除されていたような人々が招かれて、そして全く関係のないはずだった異邦人も招かれたということで、そのことが使徒の働きを見ると起こりました。ユダヤ人の中で、神の国に入った最初の人に、40歳を過ぎていた、生まれつき足のきかない人がいましたね。ペテロとヨハネが彼を立ち上がらせて、それによってサンヘドリンに彼らは連れられましたが、そうやって招かれていないはずの人たちが招かれ、神の国の中に入りました。そして後半は、百人隊長のコリネリウスを始めとして、異邦人がイエス様を信じていくことが書かれています。

ここから大きな教訓を覚えます。神の国における披露宴を思うに、これまで律法主義、そして自分を認めてもらおうとする心、見返りを求める心などが妨げになることを見ましたが、ここでは、「自分の生活があります」という人たちです。神とキリストにある交わり、その祝宴にある平和と喜びと、楽しみ、これらに招かれているのに、「いいえ、私にはこういうやらなければいけないことがありますので。」という断りをするのが、神の国に入れられない大きな原因になっているということです。

イエス様は、そういった神の国への無関心、そして自分で生活やっていけますから、という態度を、それぞれサルデイスの教会、ラオディキアの教会に対して、警告されましたね。サルデイスの教会には、「あなたがたは生きてるとされているが、実は死んでいる。」と言われました。ラオディキアの人々には、こう言われました。「黙 3:16-17 そのように、あなたは生めるく、熱くも冷たくもないので、わたしは口からあなたを吐き出す。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。」最大の霊的危機は、自分に何か欠けているのではなく、欠けていることはない、現状のままでいいのです、という慢心です。もし、「今の生活で十分です、なぜ神の国に関わる必要があるの?」と思っていたら、それこそがここでイエス様に言われているように、その食事を味わうことができないのです。

このような霊的な無感覚、自己満足は知らず知らずのうちに徐々に来ます。このパリサイ派の家に招かれた人たちのように、自分たちは大丈夫だと思っている人たちこそが、大丈夫じゃではないのです。そして、自分は大丈夫だと持っている人々が交わりにいると、そこには恵みがなくな

ってしまいます、イエス様が締め出されてしまいます。

2A 付いてくる群衆 25-35

ここでイエス様は、パリサイ人の家を立ち去ります。すると大勢の群衆がついて来たようです。

1B 費用の計算 25-33

25 さて、大勢の群衆がイエスと一緒に歩いていたが、イエスは振り向いて彼らに言われた。26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

イエス様は、興味本位で付いてきている群衆に対して、警告を出されました。午前礼拝で詳しくお話ししましたので、聞いてない方は後で聞いてください。基本、ここでイエス様が言われたのは、ご自身が通られた道です。あるいはこれからとおられる道です。ご自身に付いて来たいのであれば、同じような心構えで付いて来なければ、弟子になることはできないということです。そして、次に二つの喩えを語られます。

28 あなたがたのうちに、塔を建てようとするとき、まず座って、完成させるのに十分な金があるかどうか、費用を計算しない人がいるでしょうか。29 計算しないと、土台を据えただけで完成できず、見ていた人たちはみなその人を嘲って、30 『この人は建て始めたのに、完成できなかった』と言うでしょう。31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようと出て行くときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうか、まず座ってよく考えないでしょうか。32 もしできないと思えば、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和の条件を尋ねるでしょう。

一つは、塔の建築です。もう一つは、戦いに出ることです。歴史を紐解くと、実はどちらも最近起こった出来後のようで、彼らは身近に感じたことでしょう。一つ目の塔の建築ですが、紀元 27 年に手抜き工事した円形劇場が崩れて、なんと約 5 万人の犠牲者が出たそうです。手抜き工事や未完成の建物は、当時よく知られていたそうです。私たちの住む日本は、こういったところでは問題がないのですね。計画を立て、ちゃんと予算を決めて、着実に立てていき、完成させます。けれども、世界を見渡すと、建物が途中で終わっているものや、建築中に倒れるものや、地震も強風もないのに、自然に倒壊するものなど、まだあります。ここでは、施行した人が嘲られるとありますが、非西欧の文化にいる人たちは、恥の文化を持っていますね。面子が潰されることが本当につらいことです。

もう一つの戦いについてですが、ヘロデ・アンティパスがまさに恥を見た出来事でした。ヘロディアとの結婚にかかわります。覚えていますか、ヘロデ・ピリポの妻であったのに、彼女を自分の妻

にしました。そしてヘロデ・アンティパスには、妻ファセリスがいたのです。アラビアのアレタ王です（Ⅱコリ 11:32）。ナバタイ王国の最盛期の時の王、アレタス四世だと思われます。ペトラに行くと、最も有名な宝物殿が、アレタス四世の墓だと言われています。アレタ王は、ヘロデの姦淫で自分の娘が離縁されたことに憤りました。それでアラビア戦争をヘロデに対して起こしました。ヘロデは大敗しました。ですから、何の準備もなく戦ったらことごとく大敗してしまうことは、彼らにはよく知っていた内容でした。

どちらの話にも共通しているのが、「覚悟」です。犠牲を払う覚悟です。どちらにおいても、「座って」います。そして一つは費用の計算をしていて、もう一つでは兵力を比較してよく考えています。これまで私たちが見てきた群衆の特徴は、「自分で判断しない」ということでした。人々の流れで生きている、興味はあるのだけれども、そこで止まってしまっています。最も大きな特徴は当事者意識がないことです。食事のたとえで、イエス様の前で飲み食いしていたではないですか？と問いかけているのですが、イエス様と共に飲み食いはしていなかったのです。表向き、キリスト者のように生きてても、結局は心がついて来ないで、生活も離れて行ってしまうということは、残念ながらたくさんあります。

ある人は、「野球選手と野球のファンの違いだ」と言いました。野球ファンでいると、その気になっていますが、自分の欲に仕えているにしか過ぎません、あくまでもお客さんです。けれども、当事者になるというのは、自分のこれまでの生活についてよく考えます。いろいろな面を考えます。そして、それでも私はイエス様について行きます、と決めるのです。その時に、家族のような強い絆で結ばれている関係をどうするのか？ということを考えますね。それから、自分の生活、生きていく道をどう考えるか？ということも考えますね。そうして初めて、弟子になることができるのです。

33 そういうわけで、自分の財産すべてを捨てなければ、あなたがたはだれも、わたしの弟子になることはできません。

ここでイエス様が語られているのは、彼らの生活の安心感の基が財産にあったということです。イエス様に従う時には、必ず、最も生活臭の出るお金の問題があります。自分が食って行けるのか？ということは、私たちの行動において多くを占めます。けれども私たちは前に学びました、神の国をまず求めるということ、そして生活の必要は加えて与えられるということでした。そのために、自分の与えられた財産を人々に御国のために使いなさいということでした。

私たちは、はっきり言えば、神がいなくても生活がやっつけられますね。世界では、いつもそうだとばかりです。日本ではキリシタンが増えたのは戦国時代で、社会が混乱していて、誰も信用できないような時でした。けれども、だからこそ全ては不安定であり、唯一、変わらない方、神がおられキリストがおられることを知ることが容易でした。けれども、豊かさ、社会の安定が与えられているのは神からの賜物ですが、神を抜きにしてもその安定も豊かさもあります。わざわざ、神を信

じ、キリストを信じなくても、問題なくやっていけそうなのです。それが、イエス様が言われた「自分の財産すべてを捨てなければ、あなたがたはだれも、わたしの弟子になることはできません」という背景の考えです。物の豊かさにある安心があれば神も、救い主も要らないと考えている、そうした考えは一切、捨ててしまいなさいということです。そうでなければ、弟子として生きていけません。

2B 塩気 34-35

34 塩は良いものです。しかし、もし塩が塩気をなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。35 土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられます。聞く耳のある者は聞きなさい。」

喩えを語られているので、聞く耳のある者は聞きなさいと言われていています。関心のない人、求道しない人はこの譬えだけで終わってしまいますが、その意味を解き明かしてほしい、そして自分にもどのように関わるか知りたいと願っている人には知らされる内容です。

今の塩を考えると理解できません。今の塩は精製されているので塩気はなくなりません。昔の塩は不純物が入っているのです。塩だけが溶け出して不純物だけが残るという場合があります。そうした塩気を無くしたものは、他に何か用途があるかといいますとないので、外に投げ捨てられるだけです。つまり、塩は塩気があるからこそ役に立つのであって、塩気がなければ何の役にも立たないということです。

塩は、気候の暑い中東の地域では生きるための必需品です。暑いので食べ物が腐るのが早いのですが、防腐剤の役目を果たします。また、塩は調味料です。そして先ほど、ヤコブとラバンが食事をして契約を結んだ話をしましたが、塩味の効いた食事を取ります。それで、歴代誌第二 13 章 5 節には、「塩の契約」という言葉が出て来て、いつまでも変わらない有効な契約という意味で使われています。

キリストの弟子にならなければ、イエス様に付いてきても意味がないということです。私たちが本気でキリストの弟子になって、イエス様に付いてきていないと、結局、世において役立つ者たちにならないのです。つまり人々に霊的な渇きを起こし、社会や人々の心にある暗闇、そこに光を当てることができないのです。十字架を誇ってください、パウロはそう言いました。その生活を歩んでいる時に、初めて自分ではなく、自分の内に住んでおられるキリストが、周囲の人々に、また社会に対して影響力をもたらすことができるのです。